OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	延慶本『平家物語』における二位殿・平時子 : 苦悩の様相と平家一門の後世救済に対する役割
Author(s)	カナパット, ルーンピロム
Citation	語文. 2011, 97, p. 1-13
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69181
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

延慶本『平家物語』における二位殿・平時子

――苦悩の様相と平家一門の後世救済に対する役割――

ルーンピロム・カナパット

一　はじめに

『平家物語』において、平時子（以下、「二位殿」[1]）は、夫平清盛の出世、娘建礼門院の后位、さらに孫安徳帝の即位によって、繁栄を得て恵まれている女性として造型されている。しかし、物語は栄華を極めた様子より、平家の没落に立ち向かう二位殿の姿を重視している。本稿では、延慶本を中心に、二位殿の苦悩の様相を検討し、さらに苦悩の克服として、平家一門の後世救済に対する役割を考えてみたいと思う。

二位殿の苦悩に関して、趙文珠氏[2]は『玉葉』などの記録による二位殿の実像を踏まえ、『平家物語』における清盛の病死の場面と、三種の神器を子重衡と引き換える場面と、安徳帝の入水の場面に着目し、彼女の態度と心情について論じている。一方、鷹尾純氏[3]は、右に挙げた三つの場面などから、二位殿の造型を「家庭人としての立場と一門の指導者としての立場が一体化した。」と解釈し、さらに、安徳帝を抱いて入水をする二位殿の態度を、「やや一門の指導者の側に寄った投影なのである。」と捉えた。このような観点から見ると、二位殿の苦悩の様相、特に滅亡の場面における二位殿の言動を考察する際に、彼女の言動はどの立場からのものなのか、そもそも彼女の造型に平家の指導者的な立場が存在しているのか等について、検討する余地はある。そこで、まず平家における二位殿の指導者的な立場を、第二節において確認する。その上で、第三節において二位殿の立場を見ながら、苦悩の様相を考察する。

二位殿の苦悩の克服について考える上で注目したいのが、二位殿が安徳帝を抱いて入水した出来事を、建礼門院が後白河法皇と対面した際に語っていることである。建礼門院の回想の中で、はじめて平家一門の後世救済をするようにという二位殿の遺言が語られている。諸本の中で二位殿の遺言が記されているのは、延慶本と覚一本のみである。両本は二位殿が平家一門の鎮魂救済を建

礼門院に託することを描き出したことによって、平家一門の後世救済に対する二位殿の役割を見出すことができる。遺言の他に、入水の場面および、法皇と対面する場面における、平家一門の滅亡を一連の悪行への応報と捉える認識（以下、「応報観」）に注目したい。覚一本では、「応報観」は二位殿の認識として建礼門院の口から語られているのに対し、延慶本では、二位殿ではなく、建礼門院自身の認識として直接語られている。延慶本においては、二位殿の認識として語った覚一本と異なり、建礼門院の発言として語られることは、どのように捉えられるのかという疑問が浮上する。このような問題意識から、第四節において苦悩の克服として、二位殿の遺言及び「応報観」と、平家の鎮魂救済との関わりを考えることとする。

二　平家における二位殿の立場

本節では、延慶本の都落ちの周辺記事を通して、清盛の死後、平家における二位殿の立場を考察する。清盛の死後、二位殿の長男たる宗盛は平家の棟梁を継いだ。しかし、平家に背く者が続出し、又、木曽義仲の攻撃によって倶利伽羅合戦と篠原合戦で敗れ、平家の勢力は弱体化した。さらに、宗盛は義仲が都に攻め上る噂を聞くと、都落ちを決意した。延慶本では、都落ちした平家が旧都福原に一泊する場面を次のように記している。

二位殿モ大臣殿モ一所ニ差ツドヒテ、サテモイヅクニカ落付セ給ベキ。故入道相国ノ、カヽルベカリケル事ヲ兼テ被覚ケルニヤ、此所ヲシメテ家ヲ立、船ヲ造置レタリケル事ノ哀サヨ。コシ方向後ノ事共宣カヨワシテ、互ニ涙ヲ流給ケル程ニ、夜モホノ〴〵トアケニケリ。

〔第二末「平家福原仁一夜宿事付経盛ノ事」九五十九六頁〕

平家は福原に到着し、清盛の墓に詣でて一泊した。傍線部のように、宗盛と二位殿は平家の今後のことについて相談し、亡き清盛がかねてからこのような事が起きるだろうと、福原に家を建て、船を造っておいたと述べた。ここからは、宗盛とともに一門の今後を考える二位殿の態度が窺われる。

西国へ出発する前に、平家は自らの跡を源氏の軍兵に見付からないために、福原に火をかけた。その後、船上で宗盛は諸将を呼び、演説を行った。宗盛が演説をした姿と、その演説を聞いた諸将の反応は、次のように描き出されている。

肥後守貞能、飛騨守景家以下ノ侍共ヲ召集テ、①二位殿ハ内ニ、大臣殿ハ屋形ノ上ニテ、泣々宣ケル事コソ哀レナレ。「積善ノ余慶家ニ尽キ、積悪ノ余殃身ニ及故ニ、神ニモ放レ奉リ、君ニモステラレ奉テ、帝都ヲ迷出、客路ニ漂ル上ハ、今ハ何ノ憑カアルベキナレドモ、一樹ノ影ニ宿ルモ前世ノ契也、一河ノ流ヲ渡モ多生ノ縁猶深シ。何況汝等ハ、一旦従付ノ門客ニモアラズ、累祖相伝ノ家人也。或ハ近親ノ好、仕ニ異ナル末モ有。或ハ重代ノ芳恩コレ深キ者モ有。家門繁昌ノ昔ハ、恩澗ニ依テ私ヲ顧キ。楽ミ尽キ悲ミ来ル。今何ゾ思慮ヲハゲマシテスクハザラムヤ。其上、十善帝王、三種ノ神器

ヲ御身ニ随ヘテオワシマス。天照大神モ吾君ヲコソ守ハグヽミ給ラメ。思ヘバ宿運ツヨキ我等也。速ニ合戦ノ忠ヲ励シテ、逆徒ヲ討取テ、徳ハ昔ニ越、名ハ後代ニ留ムト思心ヲ一ニシテ、野末山末ナリトモ、君ノ落留ラセ給ワム所へ送奉ルベシ。火ノ中へ入、水ノ底ニ沈トモ、今ハ限ノ御有様ニ見成奉ベキ」ヨシ宣ケレバ、三百余人御前ニ列居タル者共、老タルモ若モ、皆涙ヲ流シ袖ヲシボリテ申ケルハ、「心ハ恩ノ為ニ仕ワレ、命ハ義ニ依テカロケレバ、命ヲバ速ニ相伝ノ君ニ献リテ、二心アルベカラズ。（中略）設日本国ノ外ナル新羅高麗ナリトモ、雲ノハテ海ノハテナリトモ、ヲクレ奉ベカラズ」ト、異口同音ニ申ケレバ、②二位殿モ大臣殿モ、悦ニツケテモ涙ニ咽テ出給フ。

〔第二末「平家福原仁一夜宿事付経盛ノ事」九七―九八頁〕

宗盛は代々平家より受けた恩恵を述べ、忠義を尽くして安徳帝を護持するようにと、諸将へ促した。宗盛の演説に対して、諸将は二心なく奉公すると誓った。宗盛が演説を行ったことと、宗盛と運命をともにする平家の人たちの態度を見ると、宗盛は平家の代表として設定されていることが分かるだろう。一方、二位殿は演説を行ったわけではなく、彼女に平家の指導者としての立場は見られない[4]。ただし、鈴木啓子氏[5]は、①傍線部、宗盛が演説を行った際に、二位殿が共にいることと、②傍線部、宗盛とともに諸将の言葉を聞いて喜んだ描写に着目し、「二位殿はここで、宗盛が率いる平家を象徴的に支える役割になっていると考えられる。」と論じている。

以上のように、延慶本では、二位殿は、宗盛のように平家の指導者的な立場に置かれていないが、平家を見守り、平家の精神的な支柱のような存在であることが見て取れるだろう。

三　苦悩の様相

前節では、清盛の死後、家を見守る存在としての二位殿の立場を見てきた。本節では、そのような二位殿の立場を考慮しつつ、清盛の病死から平家の滅亡までの記述を中心に、彼女の苦悩の様相を検討する。この問題点を論ずるにあたっては、苦悩の原因として、血縁関係を持つ者による苦悩及び、平家一門の滅亡による苦悩に分け、考えることとする。

三・一　血縁

まず、夫清盛の病死の場面を検討する。清盛は熱病に倒れ、高熱に苦しむ状態になっている。二位殿をはじめ、平家の人たちは甲冑、金銀などを神社に奉納し、清盛の病気全快を祈ったが、効験はなかった。臨終に際して、二位殿が清盛の遺言を聞いた記述は次の通りである。

閏二月二日、二位殿アツサ難堪ニケレドモ、屏風ヲ隔、枕近ク居寄テ、泣々宣ケルハ、「御病日々ニ重ナリテ、恃ミ少ク見ヘ給フ。御祈ニヲイテハ、心ノ及ブ程ハ尽シ候ツレドモ、其験ナシ。今ハ只一スヂニ後生ノ事ヲ願ヒ給ヘ。又オボシヲ

ク事アラバ、宣置キ給ヘ」ト被申ケレバ、入道クルシゲナルコヘニテ、息下ニ宣ケルハ、「我平治元年ヨリ以来、天下ヲ足ノ下ニナビカシテ、自ラ傾トセシ者ヲバ、時日ヲ廻ラサズ、忽ニ滅シニキ。帝祖大政大臣イタリテ、栄花既ニ子孫ニ及ベリ。一人トシテ背者ナカリシカバ、一天四海ニ肩ヲ並ル人ヤ有シ。サレドモ死ト云事、人毎ニ有ヲヤ。我一人ガコトナラバコソ始テ驚メ。但最後ニ安カラズ思置事アリ。流人頼朝ガ首ヲミザリツル事コソ口惜ケレ。死出山ヲ安ク越ベシトモ不覚。入道死テ後、報恩追善ノ営努々々不可有」。相構テ頼朝ガ首ヲ切テ、我墓ノ上ニ懸ヨ。其ヲゾ草ノ影ニテモ、悦クハ思ワムズル。子息、侍ハ深ク此ノ旨ヲ存テ、頼朝追討ノ志ヲ先トスベシ。仏経供養之沙汰ニ不可及」トゾ遺言シ給ケル。大将ヨリ始テ、御子孫共マデ、並居テ聞給ケリ。イトヾ罪深ク怖クゾ覚ル。

〔第三本「大政入道他界事付様々ノ怪異共有事」六〇七―六〇八頁〕

点線部のように、二位殿は清盛の枕元に近寄り、後世救済を一心に願うようにと勧め、遺言を聞いた。清盛は自らが築いてきた平家の繁栄を語り、さらに傍線部のように、追善供養をせず、頼朝の首を墓前に供えるようにという遺言を残した。清盛の死後、清盛に仕えた女房は大仏を焼失した罪のために、無間地獄の使者が清盛を連れて行くという夢を見たことが記されているのも、清盛の罪業の深さを強調する意味を持つものだろう。

清盛の熱病によって二位殿が苦悩したことは、彼女が嘆く姿からも明らかである。しかし、この記述を全体的に見れば分かるように、物語は悲しみより、棟梁としての清盛の深い罪に重点を置いている。趙氏[6]は二位殿の進言に着目し、「清盛に仏教帰依を進めている時子の描写は、〈仏経供養乃沙汰不可及〉」という清盛の答えを導くための処置だったようである。」と解釈している。よって、二位殿が仏教帰依を勧め、それに対して清盛が後世救済を拒否する設定には、妻としての二位殿の役割を通じて、清盛の深い罪を示す物語の意図が見出される。さらに、波線部のように、大将や子孫の態度が描写されているところを見ると、清盛の罪業の深さを一族が実感していることが捉えられる。

以上のように、清盛の深い罪は二位殿との対話によって引き出されている。このことから、二位殿の存在を清盛、また平家の罪を示す者として位置づける物語の意図が窺われるだろう。なお、平家滅亡の際、それを「応報観」によって受け止める問題点については平家の滅亡の記述で後述する。

恩愛による二位殿の苦悩は、夫婦の間以外に、子重衡の助命ができない記述にも見られる。清盛の死後、都落ちした平家軍は、一谷合戦で完敗し、平家の人々は屋島へ敗走し、重衡が捕虜となった。その後、重衡を三種の神器と交換せよ、という院宣が平家に送られた。二位殿は重衡の手紙に嘆き、子の助命のために、一門に対し神器の返還を訴えた。しかし、安徳帝の立場を維持する唯一のものは神器であるゆえに、神器の返還という二位殿の願

いは拒否されたのである。子の助命を断られた二位殿は、次のように心境を打ち明けた。

二位殿又宣ケルハ、「故入道ニ後レテ、片時命生テ有ベシトモ思ハザリシカドモ、主上カクイツトナク旅立セ給タル心苦サト、又君達ヲモ世ニアラセバヤト思志ノ深サニコソ、今マデナガラヘテモ有ツレ。中将一谷ニテ生取ニセラレヌト聞シヨリ、肝神モ身ニソワズ。イカカニシテ此世ニテ今一度相見ルベカルラムト思ヘドモ、夢ニダニモ見ヘネバ、イトヾ胸セキアゲテ、湯水ヲモ喉ヘ入ラレズ。此文ヲ見テ後ハ弥思遣ル方モナシ。中将世ニナキ事ト聞バ、我モ同道ニ消ナムズレバ、再物ヲ思ワヌ先ニ、只我ヲ先ニ失ヒ給ヘ」ト、ヲメキ叫バレケレバ、ゲニモサコソ思給ラメト哀ニ覚ヘテ、人々モ涙ヲ流シテ、各フシ目ニナラレケレバ、涙ヲヲサヘテ立給ヌ。

〔第五末「重衡卿賜院宣西国へ使ヲ被下事」三〇〇頁〕

夫を亡くし、又、子の助命のために何も出来ない二位殿の悲しみが、右に挙げた本文に表明されている。ここで注目したいのは傍線部、安徳帝の将来を心配し、宗盛たちをもう一度繁栄させたいと思うからこそ、今まで生きながらえてきたという二位殿の告白である。清盛の死後、平家の人々を見守り、支えようとする、後家としての二位殿の姿勢は、その告白に表明されている。ところが、彼女は子の助命のために、平家の立場を維持する内侍所を手放す決意をした。物語が設定した平家への責任と、親子恩愛との間の葛藤には、母としての苦悩とともに、平家の立場より親子の恩愛を優先せざるをえない二位殿の姿を読み取ることができよう。

以上の場面から、悲歎に暮れる妻母としての二位殿の苦悩が端的に表されている。又、親子の深い恩愛によって、平家の立場を見守ろうとする立場は、大きく動揺させられているのである。それでは、平家の滅亡に際して、彼女の態度はどのように変貌するのだろうか。

三・二　平家一門

源義経が法皇の御所に参り、平家追討のことを奏聞した。一方、平家は屋島で漂泊の生活を送り、三年目になった。関東から源氏の軍兵が屋島へ攻めてくる噂を聞いた二位殿や建礼門院の姿は、次のように描き出されている。

東国ノ軍兵来ト聞ヘケレバ、又イカヾ有ムズラントテ、国母ヲ奉始、北政所、女房達、賤キシヅノメシヅノヲニ至マデ、頭ラ指ツドヒテ、只泣ヨリ外ノ事ゾナキ。

〔第六本「判官為平家追討西国へ下事」三六八頁〕

右のように、源氏の攻勢に怯え、平家の状況に不安を抱えている二位殿の心境が表出されている。しかし、平家の滅亡の象徴と言える壇ノ浦合戦の場面では、以前の恐怖、あるいは不安はもう見られない。滅亡に際して、二位殿の態度は次のように描き出されている。

二位殿ハ今ハカウト思ワレケレバ、ネリバカマノソバ高挟ミテ、先帝ヲ負奉リ、帯ニテ我御身ニ結合奉テ、宝剣ヲバ腰ニサシ、神璽ヲバ脇ニハサミテ、鈍色ノニ衣打カヅキテ、今ハ限ノ船バタニゾ臨マセ給ケル。先帝今年ハ八ニ成セ給ケルガ、折シモ其日ハ山鳩色ノ御衣ヲ知召タリケレバ、海ノ上ヲ照シテミヘサセ給ケリ。御年ノ程ヨリモネビサセ給テ、御顔ウツクシク、黒クユラ〳〵トシテ、御肩ニスギテ、御背ニフサ〳〵トカヽラセ玉ヘリ。二位殿カクシタヽメテ、船バタニ臨マレケレバ、アキレタル御気色ニテ、「此ハイヅチヘ行ムズルゾ」ト仰有ケレバ、「君ハ知食サズヤ、穢土ハ心憂所ニテ、夷共ガ御舟ヘ矢ヲ進ラセ候トキニ、極楽トテ、ヨニ目出キ所ヘ具シ進セ候ゾヨ」トテ、王城ノ方ヲ伏拝給テ、クダカレケルコソ哀ナレ。「南無帰命頂礼天照大神正八幡宮、確ニ聞食セ。吾君十善ノ戒行限リ御坐セバ、我国ノ主ト生サセ給タレドモ、未幼クオワシマセバ、善悪ノ政ヲ行給ワズ。何ノ御罪ニ依テカ百王鎮護ノ御誓ニ漏サセ給ベキ。今カヽル御事ニ成セ給ヌル事、併ラ我等ガ累葉一門、万人ヲ軽シメ朝家ヲ忽緒シ奉、雅意ニ任テ自昇進ニ驕シ故也。願ハ今生世俗ノ垂迹三摩耶ノ神明達、賞罰新ニオワシマサバ、設今世ニハ此誠ニ沈ムトモ、来世ニハ大日遍照弥陁如来、大悲方便廻シテ必ズ引接シ玉ヘ。今ゾシルミモスソ川ノ流ニハ浪ノ下ニモ都アリトハ」ト詠ジ給テ、最後ノ十念唱ツヽ、波ノ底ヘゾ被入ケル。

〔第六本「壇浦合戦事付平家滅事」四〇一―四〇二頁〕

前掲のように、子と神器との交換の記述においては、平家の立場を見守る役割に対する二位殿の動揺があった。ところが、平家の滅亡に際しては、二位殿は知盛から平家の敗戦を聞いた後、迷わずに、安徳帝を抱き、安徳帝の正統性の証明たる神璽と宝剣とともに入水をした。そのような凛々しい二位殿の姿を見ると、物語は平家の立場を支えている安徳帝と神器を最期まで見守る役割を、後家たる二位殿に与えていることが分かるだろう。平家の立場に対する二位殿の役割に度合いの変化はあるものの、滅亡にあたっては平家一門を見守るという役割は顕著に強調されている。

入水の直前、二位殿の態度で注目すべきは、安徳帝の死の理由として、自ら一門の悪行を認識していることである。安徳帝の死の原因は、傍線部「平家一門が多くの人、朝廷を侮り、自分の思うように高い位に昇り進み、驕り高ぶったからだ」と明確に述べられているように、平家の悪行の応報として認識されている。さらに、波線部のように、現世では平家が神罰を与えられたが、後世は仏の慈悲によって救済されるようにという仏の救済に帰依する態度が示唆される。

覚一本においても、二位殿の「応報観」は見て取れる。

君はいまだしろしめされさぶらはずや。先世の十善戒行の御力によッて、いま万乗の主と生れさせ給へども、悪縁にひかれて、御運すでにつきさせ給ひぬ。

〔巻第十一「先帝身投」三八二頁〕

右のように、前世の十善戒を守り行った力によって、この世で

天子になったが、悪縁に引かれたから、運命が尽きるという因果応報の原理を、二位殿は安徳帝に説き聞かせている。覚一本の「悪縁にひかれて」という箇所から、二位殿の「応報観」は示唆されるが、延慶本のように詳しく記されていない。このように、平家一門を見守る二位殿の役割を通して、悪行への応報という認識を重視している延慶本の姿勢が窺われる。

以上のように、平家の滅亡に際して、二位殿は躊躇せず、一門の悪行を滅亡の原因としている。では、滅亡後、平家一門の罪による苦悩は、どのように克服されるのかを次節で考察する。

四　苦悩の克服

平家一門の鎮魂救済を果たす役割は、周知のように、『平家物語』の何れの諸本においても、建礼門院に与えられている。では、平家一門の鎮魂救済に対する二位殿の役割は、どのように描かれているのか。本節では、二位殿の遺言と言動から、平家の鎮魂救済との関連性を考察する。

四・一　二位殿の遺言

平家の滅亡後、生き残った建礼門院は出家し、寂光院で一心に修行に励んでいた。翌年、後白河法皇は忍んで、その寂光院を訪れた。法皇と対面した建礼門院は自らの人生を、六道に喩えて語った。延慶本においては、六道語りに続き、他の諸本に見られない安徳帝追憶の語り[7]があり、その中に二位殿の遺言が登場する。

安徳帝追憶の語りでは、建礼門院は母二位殿と、子安徳帝との離別による悲歎や、親子の恩愛を語り、安徳帝の入水を回想した。ここで注目すべきは、実際の入水の場面には記されていないことを、建礼門院がこの回想の場面で語っていることである。

（建礼門院）一日片時モ世ニナガラフベシトモ不覚ニ侍シカバ、『共ニ底ノミクヅト成ム』ト取付奉シヲ、二位殿、『人ノ罪ヲバ、親ノ留リ子ノ残リテ訪ワヌカギリハ、苦患遁レザムナル物ヲ。サレバ我身コソ今ハ空ク成ルトモ、残留テ、ナドカ先帝ノ御菩提ヲモ、我等ガ苦患ヲモ訪給ハザルベキ』トテ、引放テ出給シカバ

（第六末「法皇小原へ御幸成ル事」五二八-五二九頁）

右のように、建礼門院は自分も母と子とともに入水しようとしたが、二位殿の遺言によって説得されたことを告白した。二位殿は、傍線部「人の罪とは、親が留まって弔う、あるいは子が残って弔うものである。そうでなければ、苦悩を免れえない。」とあるように、親子の関係を持つ者によってなされる後世救済を説いた。ここで問題なのは、波線部「残留テ、ナドカ先帝ノ御菩提ヲモ」に続く、「我等ガ苦患」が二位殿自身と平家の人たちの両方を指しているのかという点である。平家の人たちの救済に関する二位殿の願望は、この箇所以外には見当たらない。ところが、「天子聖霊、成等正覚、一門尊霊、出離生死悲願」と建礼門院が念仏した箇所を見れば、物語は二位殿の遺言をその悲願と通じ合わせるために、「我等ガ苦患」いわゆる二位殿と平家の人たちの

救済を語ると推定できる。

延慶本との影響関係がある『閑居友』[8]においても二位殿の遺言が登場し、その中に延慶本と同様に親子の恩愛が取り上げられている。『閑居友』における二位殿の遺言は次の通りである。

我も入なんとし侍しかば、「女人をば昔より殺す事なし。構えて残り留まりて、いかなるさまにても後の世を弔ひ給べし。親子のする弔ひは、必ず叶ふ事也。誰かは今上の後世をも、我後世をも弔はん」とありしに

〔第八話「建礼門院女院御庵に、忍びの御幸の事」四四〇頁〕

傍線部のように、親子の関係を持つ者がする後世救済について記されている。ただし、波線部、「誰かは今上の後世をも、我後世をも弔はん」には、平家一門ではなく、安徳帝と二位殿自らの救済のみ示されている。このように、親子関係の間の救済を重視する『閑居友』を、延慶本の二位殿の遺言と比較してみると、親子関係にとどまらず、母の恩愛を子の後世救済のきっかけとして、一門の救済へと結びつける延慶本の態度が浮かび上がってくる。では、そのような延慶本の態度は、他の諸本の中にも見られるのだろうか。

延慶本以外に、二位殿の遺言が記されるのは、覚一本のみである。覚一本における二位殿の遺言は延慶本と異なり、六道語りの中に見られる。建礼門院は二位殿が入水した出来事を回想し、平家の人々の泣き叫んだ声を、叫喚地獄の炎の底で苦しむ罪人に喩えた。建礼門院に残した二位殿の遺言は次の通りである。

さても門司、赤間の関にて、いくさはけふを限と見えしかば、二位の尼申しおく事さぶらひき。『男のいきのこらむ事は、千万が一つもありがたし。設ひ又遠きゆかりは、おのづからいき残りたりといふとも、我等が後世をとぶらはん事もありがたし。昔より女はころさぬならひなれば、いかにもしてながらへて、主上の後世をもとぶらひ参らせ、我等が後生をもたすけ給へ』

〔潅頂巻「六道之沙汰」五二一頁〕

二位殿は、傍線部「男が生き残るいうことは、千、万に一つも難しい。又遠い親類はたとえたまたま生き残ったといっても、我々の後世の冥福を弔うということもありえないことだ。昔から女は殺さないのが常だから」とあるように、女性を殺さないという戦の習いと、血縁関係のことを述べた。又、延慶本と同様に、波線部、安徳帝の後世を弔い、「我等が後生」を救済するようにと遺言をした。後世救済という二位殿の願望はこの記述に続く、畜生道になぞらえる場面にも見られる。平家一門の人々が龍宮城にいる夢を、建礼門院が語った記述は次の通りである。

播磨国明石浦について、ちッとうちまどろみてさぶらひし夢に、昔の内裏にははるかにまさりたる所に、先帝をはじめ奉ッて、一門の公卿殿上人、みなゆゆしげなる礼儀にて侍ひしを、都を出でて後、かかる所はいまだ見ざりつるに、『是はいづくぞ』と問ひ侍ひしかば、弐位の尼と覚えて、『竜宮城』と答へ侍ひし時、『めでたかりける所かな。是には苦は

なきか』と問ひさぶらひしかば、『竜畜経のなかに見えて侍ふ。よく〳〵後世をとぶらひ給へ』と、申すと覚えて夢さめぬ。其後はいよいよ経をよみ念仏して、彼御菩提をとぶらひ奉る。

〔潅頂巻「六道之沙汰」五一三頁〕

右のように、安徳帝と一門の公卿が現れた背景に、二位殿が波線部「よく〳〵後世をとぶらひ給へ」と建礼門院に命じた箇所から、平家一門を救済してもらいたいという二位殿の願望が捉えられるだろう[9]。よって、「我等が後生をもたすけ給へ」という二位殿の遺言は、平家一門の救済を指していることが明確になる。

要するに、両本における二位殿の遺言から、平家一門の救済に対する二位殿の役割が見て取れる。ただし、建礼門院を生き長らえさせる理由には相違点がある。すなわち、延慶本は、上述のように、親子関係を持つ者が弔わなければ救済はできないと言い、親子の恩愛を後世救済へと導くものとして提示しているのである。一方、覚一本は、血縁関係に触れるものの、延慶本のように、親子間には特定していないのである。このように、両本における二位殿の遺言は、親子の恩愛の有無という点で異なると言えるだろう。その上に、親子の恩愛を平家一門の救済へと押し広げていることが、延慶本における二位殿の遺言の特質であると確認できる。

以上のように、延慶本では、二位殿は建礼門院に親子の間の救済を説き、安徳帝と二位殿のみならず、平家一門の救済を課する者として設定される。平家の後家として、一門を後世救済へ導き出す二位殿の役割を読み取ることができるのである。

四・二　平家の悪行の応報に対する意識

平家の救済に関する二位殿の役割において、もう一つ重要な問題点は、平家の悪行の応報を認識する態度である。二位殿の「応報観」を考察する前に、まず法皇と対面する場面における建礼門院の恨みの存在を確認しておく。

『源平盛衰記』をはじめ読み本系には、法皇が都落ちの際に西国へ同行せず平家を見捨てる事や、また大宰府落ちの際に尾方維義に平家の攻撃を命令した恨みを、建礼門院が告白したという恨み言の語りがある。しかしながら、延慶本は他の読み本系と異なり、法皇への恨みを語っていない。ただし、延慶本にも本来恨み言の語りがあっただろうという仮説は、佐伯真一氏の論考[10]で指摘されている。佐伯氏が挙げた一つ目の理由は、六道語りの中で何道の記述ともつかない大宰府落ちの記述に、法皇の命令による維義の攻撃と、その苦難が記されていることである。もう一つの理由は、建礼門院の往生の際に、「今生ノ御恨ハ一旦ノ事也。」という文脈からの「御恨」が存在し、恨み言の語りがある他の読み本系と呼応していることである。佐伯氏の指摘のように、延慶本における勝利者への恨みは、他の読み本系のように注目されていないが、建礼門院の回想の記述に潜んでいることは否定できないだろう。一方、覚一本などの語り本系は、餓鬼道に喩えられる維義の攻撃には、法皇の命令のことを記していない。覚一本では、恨

みではなく、建礼門院の過去の人生とその苦悩の語りに重点が置かれているのである。

では、建礼門院は平家滅亡を回想する際にして、勝利者に対してどのような反応をしたのかを考察する。延慶本における、建礼門院が語った入水の直前の出来事は次の通りである。

『イヅクへ行ベキゾ』ト先帝被仰シカバ、『浄土へ具シ進ベシ』トテ、先伊勢大神宮ノ方ヲ伏拝奉リ給テ、西ニ向テ、『流転三界中、恩愛不能断、奇恩入無為、真実報恩者、南無西方極楽教主阿弥陀仏』ト、十念高声ニ唱給テ、『設我得仏、十方衆生、至心信楽、欲生我国、乃至十念、若不生者、不取正覚、光明遍照十方世界、念仏衆生摂取不捨ノ御誓タガヘ給ワズ、必ズ引摂ヲ垂給ヘ』ト唱モアヘ給ハズ、海ニ飛入リ給シ音計ゾカクカニ船底ニ聞ヘシカドモ、消ハテ絶入ニシ心ノ内ナレバ、夢ニ夢ミル心地シテ、貞ニモ覚ヘ不侍キ。世々生々ニモ其面影争カ忘レ侍ベキ。誠ニ振旦高麗ニハ賢ヲエラビ智ヲ尊ビテ、其氏ナラネドモ天子ノ位ヲ践トカヤ。我朝ニハ御裳濯川ノ御流之外ハ、此国ヲ治メ給ワズ。然ニ先帝ハ神武八十代之正流ヲ受テ、十善万機ノ位ヲ践給ナガラ、齢未幼少ニマシ〳〵シカバ、天下ヲ自治ル事モナシ。何ノ罪ニ依テカ、忽ニ百皇鎮護ノ御誓ニ漏レ給ヌルニヤ。是即我等ガ一門、只官位俸禄身ニ余リ、国家ヲ煩スノミニアラズ、天子ヲ蔑如シ奉リ、神明仏陀ヲ滅シ、悪業所感之故也。

〔第六末「法皇小原へ御幸成ル事」五二九頁〕

傍線部のように、実際の入水の場面に記されていない、阿弥陀の救済に関する経典の言葉が、二位殿の発言として語られている。[11]それに続き、建礼門院は安徳帝が正当な帝であることを主張し、何の罪も犯していないのに、なぜ神々の誓いに漏れ、悲惨な運命に到ったのかと問いかけた。その問いに対して、波線部のように、その原因は「我等一門が高い位に昇り、多くの禄を受けて国家を煩わせたのみならず、天子を侮り軽んじ、神仏を滅ぼした悪行の報いからだ」と、彼女自身で答えた。ここに、自ら平家一門の罪を認め、それを法皇に懺悔する建礼門院の態度が表されている。小林美和氏と佐伯真一氏[12]は、平家の滅亡後、勝利者の代表たる法皇に懺悔する建礼門院の行動を、勝利者への恨みの解消と読み取り、恨みの解消から、往生・鎮魂へ展開する物語の構造を指摘している。

これに対し、前節で見てきたように、延慶本は平家を見守っていた後家たる二位殿の発言によって「応報観」を表明している。又、建礼門院が法皇と対面する場面において、正当な帝たる子安徳帝の死による悲哀の感情をその「応報観」に追加し、国母の苦悩として法皇に伝えている。この二つの場面を見ると、二人の女性のそれぞれの立場を通して、「応報観」を重視している延慶本の姿勢が明確になる。とりわけ、「応報観」の内容については、安徳帝が罪を犯していないことを主張することと、滅亡の原因として、驕り高ぶり、天子などを侮った平家の悪行を認識することで、彼女たちの「応報観」が一致している。仮に、建礼門院の

「応報観」を論じた小林氏と佐伯氏の指摘のように、敗北者が自らの悪行を認識することを、恨みを解消する要素とするのならば、二位殿の「応報観」にも、恨みの解消へと展開する仕掛けが施されていると考えられるだろう。

ただし、ここで見過ごせないのは、この回想の記述で「応報観」が建礼門院自身の認識として直接語られることである。二位殿によって一門の救済が建礼門院に託され、又、「応報観」が二位殿ではなく、建礼門院の認識として設定される一連の流れを見れば、物語は一門の救済の役割を二位殿から建礼門院へ移行したことが読み取れる。このような設定により、滅亡の際に重視される平家一門を見守るという二位殿の役割は弱められるのである。

一方、覚一本における入水の回想の記述にも、「応報観」が見られる。ただし、それは建礼門院の立場からではなく、入水の場面と同様に二位殿の発言として語られている。建礼門院が語った二位殿の発言は次の通りである。

『尼ぜ、われをばいづちへ具してゆかむとするぞ』と仰せさぶらひしかば、いとけなき君にむかひ奉り、涙をおさへて申しさぶらひしは、『君はいまだしろしめされさぶらはずや。先世の十善戒行の御力によッて、今万乗の主とは生れさせ給へども、悪縁にひかれて、御運既につき給ひぬ。

〔潅頂巻「六道之沙汰」五二二頁〕

ここでの二位殿の発言は、実際の入水の場面のものと同じ（前掲）で、その「応報観」は波線部「悪縁にひかれて」という言葉に認められよう。一方、建礼門院自身の「応報観」は、延慶本のように法皇と対面をする場面ではなく、彼女の往生前の場面に見られる。

是はただ、入道相国、一天四海を掌ににぎッて、上は一人をもおそれず、下は万民をも顧みず、死罪流刑、思ふ様に行ひ、世をも人をも憚られざりしがいたす所なり。父祖の罪業は、子孫にむくふといふ事、疑なしとぞ見えたりける。

〔潅頂巻「女院死去」五二六頁〕

法皇が帰った後、建礼門院は生き残った平家の人々の苦しい生活を語った。話の終わりに、平家の不幸の根源は父清盛の「罪業」であると特定し、清盛の傲慢な態度を詳細に説いた。ここには、執着の解消から往生へという物語の展開が設定されていると考えられる。前述のように覚一本では、そもそも建礼門院の恨みが語られていないし、又、執着の解消は往生の直前に語られる建礼門院の「応報観」に表明されていることから、覚一本における二位殿の「応報観」は、延慶本のように恨みの解消へ展開する仕掛けとは考え難い。それはむしろ単なる一連の滅亡の出来事として語られているのだろう。ところが、覚一本において滅亡の場面における「応報観」が、建礼門院の回想の中で二位殿の口から語られているゆえに、平家滅亡の際における二位殿の役割は弱化しないのである。

以上のように、延慶本における二位殿の「応報観」は覚一本には見られない、恨みの解消から後世救済へと展開する仕掛けと見

做される。ただし、延慶本は滅亡の場面における「応報観」を建礼門院の認識とし、一門救済の役割を後家たる二位殿から、国母たる建礼門院へ移行した際に、家を見守っていた後家としての二位殿の役割が弱められることは認めざるを得ないだろう。

五　おわりに

以上のように、延慶本における二位殿の苦悩と、苦悩の克服としての遺言及び、平家の悪行の応報に対する意識を考察してきた。平家の滅亡前、二位殿は、夫と子への深い恩愛によって悲歎に暮れると同時に、平家一門を見守るという役割として家の没落に直面するという、両方の立場を通して苦悩の様相が描き出されている。滅亡後、二位殿によって一門の救済が建礼門院に託され、又、「応報観」が建礼門院自身の認識として語られる設定になっているため、二位殿は表立った役割を演じていない。しかし、延慶本は、母としての建礼門院の恩愛を、子安徳帝と平家一門の後世救済へと結びつける装置として、二位殿の遺言を利用している。加えて、二位殿の「応報観」は建礼門院の「応報観」と共通し、恨みの解消へ向けての仕掛けの一つと見做される。このような遺言及び、「応報観」の存在によって、一門を鎮魂救済へ導き出す二位殿の姿が浮き彫りになる。その意味で、延慶本における二位殿は、建礼門院のように一門の救済を果たす者ではないが、恨みの解消・平家一門の救済の主題を支えている存在として位置づけられていると言えるだろう。

注

(1)『平家物語』は主に平時子を「二位殿」と称しているが、六道之沙汰の記述では「二位の尼」となっている。

(2)　趙文珠「平家物語における二位尼平時子―覚一本と延慶本を中心に」『梅光女子院大学大学院新樹』十三（一九九八年十月）

(3)　鷹尾純「二位尼と宗盛」『解釈と鑑賞』四七-七（一九八二年六月）

(4)　長門本では「肥後守貞能、飛騨守景家、越中前司盛俊以下、侍どもをめして、二位殿、おほせられけるは」とあるように、演説を行った人は、宗盛ではなく、二位殿となっている。（長門本巻第十四「朝綱重能有重被レ免事」）

(5)　鈴木啓子「『平家物語』と〈家〉のあり方―建礼門院と二位殿をめぐって」（『文学』三-四　二〇〇二年七月）

(6)　前掲注（2）

(7)　佐伯真一『建礼門院という悲劇』（角川選書　二〇〇九年）は、建礼門院が法皇と対面する場面における建礼門院の語りを、「六道語り」、「恨み言の語り」、「安徳帝追憶の語り」という三つの語りに分けて考察する。

(8)『閑居友』巻第八には「建礼門院女院御庵に、忍びの御幸の事」がある。法皇が建礼門院を訪ね、建礼門院が平家の滅亡の出来事を回想して語るという設定は『平家物語』の大原御幸に通じているが、六道語りは存在していない。『閑居友』のこの記事と、『平家物語』の関係については、『閑居友』が『平家物語』の典拠であるか、それとも両本は直接的な関係ではなく、同じ一つの材料を持っている等の問題点が論じられている。麻原美子「『閑居友』と『平家物語』―典拠説をめぐって」（『日本女子大学紀要（文学部）』一九号、一九七〇年三月）、水原一「建礼門院説話の考察」（『延慶本平家物語論考』加藤中道館　一九七九年）、武久堅「壇

ノ浦合戦後の女院物語の生成―『閑居友』と延慶本平家物語の関係・再検討」(『平家物語発生考』おうふう　一九九九年)を参照。

(9)　延慶本の龍宮城の夢の記述には、二位殿と安徳帝が存在していない。後世救済を託する人は新中納言知盛となっている。

(10)　前掲注(7)

(11)　生形貴重「「先帝入水伝承」の可能性―延慶本『平家物語』「先帝入水」をめぐって」(『軍記と語り物』二四　一九八八年三月)は、二位殿の言葉として記された経典の言葉と、平家一門の後世救済との関連性を、次のように論じている。

「流転三界中、恩愛不能断、奇恩入無為、真実報恩者、南無西方極楽教主阿弥陀仏」は『清信士度人経』に見られるという偈である。(中略)ここで母親の建礼門院に先立って入水する安徳天皇の霊魂を弔うために書き込まれているのであろう。「設我得仏、十方衆生、至心信楽、欲生我国、乃至十念、若不生者、不取正覚」は周知の通り、『大無量寿経』に語られる弥陀第十八願であり、入水する安徳天皇を極楽へ往生させんとするものである。これらの経典の引用は、まさに物語を貫いている安徳帝・平氏一門への鎮魂の想いの延長線上に据えられるべき文脈である。

(12)　小林美和「『平家物語』の建礼門院説話―延慶本出家説話考」(『平家物語生成論』三弥井書店　一九八六年、初出一九八〇年)と、佐伯真一前掲注(7)著書

使用テキスト

『新編日本古典文学全集46　平家物語2』(小学館　一九九四年)
『延慶本平家物語本文篇下』(勉誠社　一九九〇年)
『平家物語長門本・延慶本対照本文　中』(勉誠出版　二〇一一年)
『新日本古典文学大系40　宝物集・閑居友・比良山古人霊託』(岩波書店　一九九三年)

(Ruenpirom Kanapat　本学大学院博士後期課程)

※引用に際し、一部の漢字を該当する常用漢字に改めた。